「頑張る学校応援プラン」

～ふくしまの挑戦と戦略～

平成30年度
授業改善グランドデザイン

全国学力・学習状況調査の結果分析と学力向上の方策

1 全国学力・学習状況調査の結果の概要 P1

2 全国学力・学習状況調査の結果に見るふくしまの強みと課題 P2

3 国語科、算数・数学科、理科の分析 P5

4 児童生徒質問紙調査、学校質問紙調査の結果概要 P11

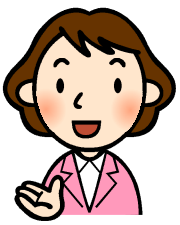
5 ふくしまの「授業スタンダード」を活用した授業の充実 P13

6 教員相互の学び合いが生まれる学校の実践事例 P17

7 ふくしまの強みを生かし、課題の克服を目指して！ P19

平成30年7月

福島県教育庁義務教育課



◎すべてのデータを、福島県教育庁義務教育課WEBサイトからPDFでダウンロードいただけます。

http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/70056a　または　福島県教育庁義務教育課← 検索

1　全国学力・学習状況調査の結果の概要

調査に関する概要

実　施　日	平成30年4月17日（火）	
実施校数	小学校　431校（15,143人）	中学校　218校（15,908人）
調査学年	小学校6年生	中学校3年生
調査教科	小学校　国語、算数、理科	中学校　国語、数学、理科

※　義務教育学校（前期課程・後期課程）及び特別支援学校（小学部、中学部）を含む。

校種・教科に関する調査結果の概要

福島県と全国の平均正答率

小学校	福島県(公立)	全国(公立)	所　見
国語A	72	70.7	全国平均をやや上回っている
国語B	54	54.7	おおむね全国平均
算数A	64	63.5	おおむね全国平均
算数B	51	51.5	おおむね全国平均
理　科	60	60.3	おおむね全国平均

中学校	福島県(公立)	全国(公立)	所　見
国語A	76	76.1	おおむね全国平均
国語B	61	61.2	おおむね全国平均
数学A	64	66.1	全国平均を下回っている
数学B	44	46.9	全国平均を下回っている
理　科	66	66.1	おおむね全国平均

A：主として「知識」に関する問題　　B：主として「活用」に関する問題

※　結果の公表について

今年度から、国の公表方針及び提供資料に基づき、県の数値については整数値での公表としている。

調査結果の総括（公立）

○　本年度の全国学力・学習状況調査結果について、本県（公立）の平均正答率を、校種・教科・問題種別に、全国平均正答率を基準として見ると、小学校国語Ａは全国平均をやや上回っており、小学校国語Ｂ、小学校算数Ａ・Ｂ、小学校理科、中学校国語Ａ・Ｂ、中学校理科はおおむね全国平均、中学校数学Ａ・Ｂは全国平均を下回っている。

○　小学校国語Ａや苦手としていた小学校算数Ｂなどで改善傾向が見られ、ほとんどの科目が全国平均レベルに達している。一方、中学校数学に関しては、Ａ問題・Ｂ問題ともに全国平均を下回っており、課題が大きい。

○　質問紙調査から明らかになった本県児童生徒の学習習慣については、これまで同様に全国より望ましい傾向が見られる。

○　前向きに頑張ろうとする児童生徒が増えてきていることがうかがえる。

○　各学校においては、校長の強いリーダーシップのもと、自校の結果及び児童生徒一人一人の解答状況や学力の実態を多面的に分析し、教科や学年・校種を越えて、課題解決に向けた方策を明らかにするとともに、教員相互の学び合いを基盤に、全校体制で効果ある取組を進めていくことが大切である。

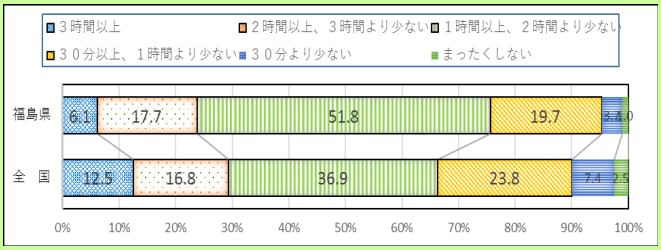
2　全国学力・学習状況調査の結果に見るふくしまの強みと課題

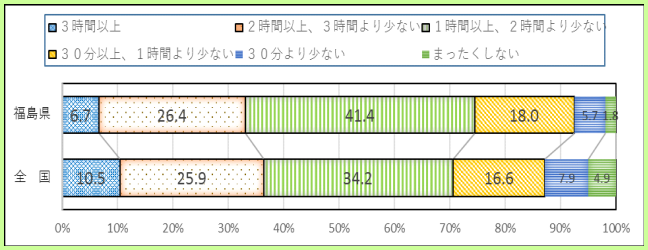
ふくしまの強み（よさ）

本県の児童生徒は、学習習慣が定着し、前向きに頑張ろうとする姿がうかがえます。

しっかりと家庭学習に取り組んでいます

【小学校】　学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしていますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間を含む）　【中学校】

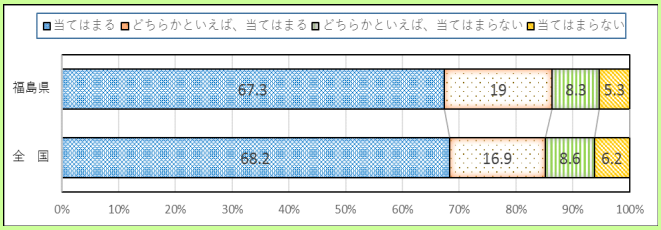


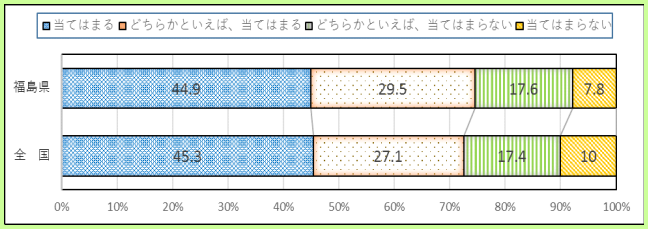


1日当たりの学習時間において、月～金曜日に1時間以上学習している割合は、小学生75.6%(全国比＋9.4ポイント)、中学生74.5%(全国比＋3.9ポイント)で、継続的に取り組んでいる。

将来の夢や目標をもち、継続的に取り組む「意欲」が育っています

【小学校】　将来の夢や目標をもっていますか　【中学校】

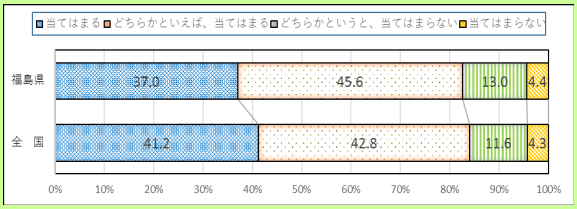




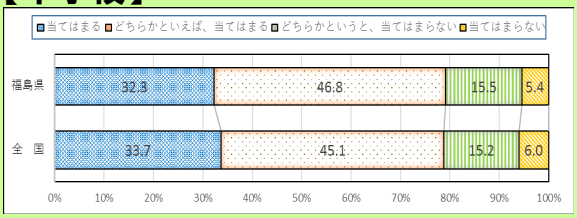
将来の夢や目標をもって取り組む児童生徒の割合は、小学生は86.3%（全国比＋1.2ポイント)と全国平均をやや上回っており、中学生は74.4%(全国比＋2.0ポイント)と全国平均を上回っている。

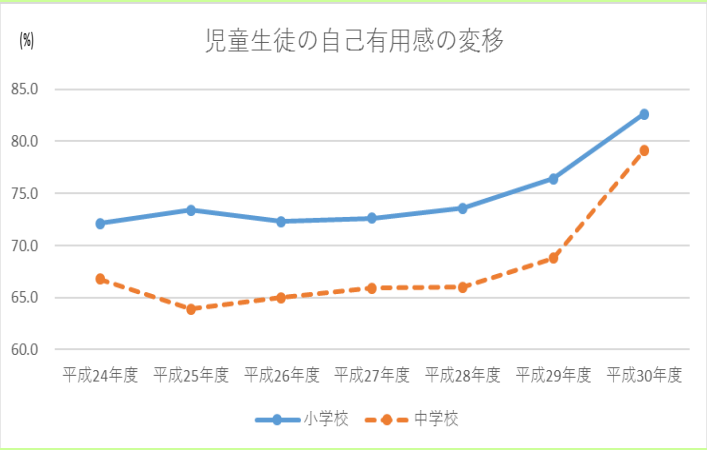
自己有用感を実感している児童生徒が年々増加しています

【小学校】 自分には、よいところがあると思いますか



【中学校】

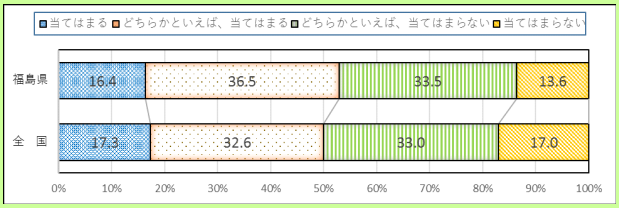




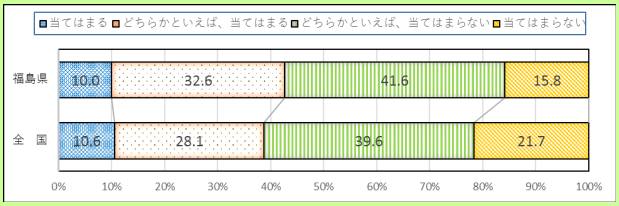
自分のよいところがあると意識する児童生徒の割合は、ほぼ全国平均である。しかし、平成24年度からの本県児童生徒の意識の変移を見ると、その割合は年々増加している。

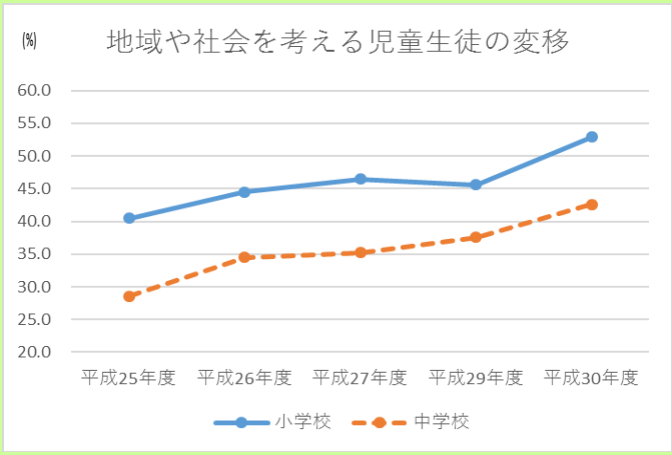
地域や社会のことを考える児童生徒が増えています

【小学校】 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか



【中学校】





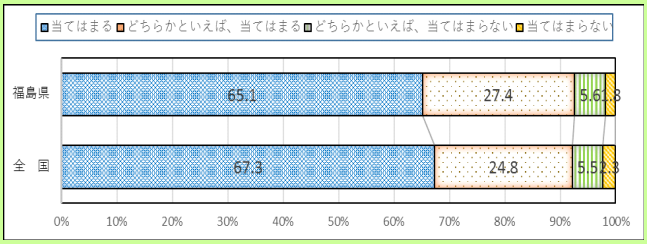
地域や社会をよくするために何をすべきかを考えている児童生徒の割合は、全国平均を上回っている。また、平成25年度からの本県児童生徒の意識の変移を見ると、その割合は年々増加している。

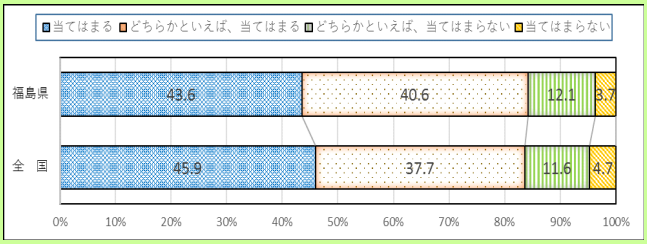
算数・数学への興味・関心等を生かし、授業改善に取り組むことにより、児童生徒の資質・能力を育成します。

ふくしまの課題

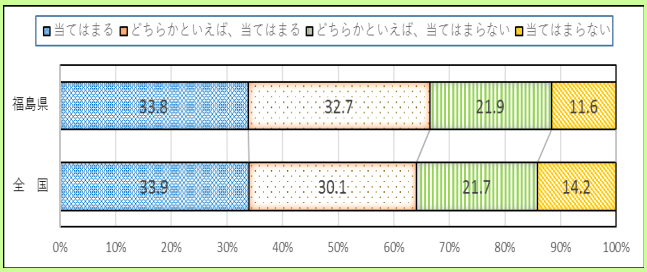
算数・数学に関する児童生徒の実態

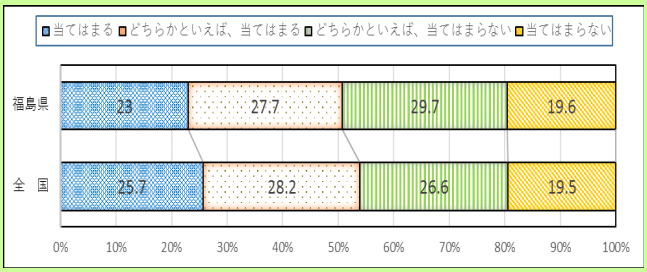
【小学校】 算数（数学）の勉強は大切だと思いますか 【中学校】



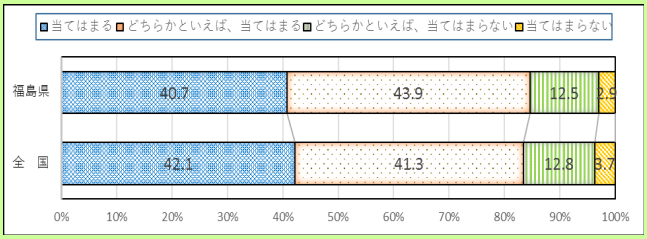


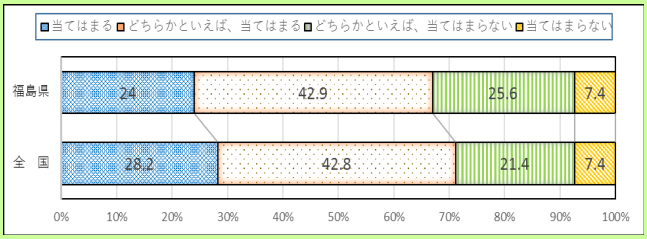
【小学校】 算数（数学）の授業が好きですか 【中学校】





【小学校】 算数（数学）の授業の内容はよく分かりますか 【中学校】





○　「算数（数学）の授業が好きですか」の問いに対して、肯定的な回答をしている児童生徒の割合は小学校が全国比＋2.5ポイント、中学校が全国比－3.2ポイントである。「算数（数学）の勉強は大切だと思いますか」の問いに対して、肯定的な回答をしている児童生徒の割合は、小学校が全国比＋0.4ポイント、中学校が全国比＋0.6ポイントである。「算数（数学）の授業の内容はよく分かりますか」の問いに対して、肯定的な回答をしている児童生徒の割合は、小学校が全国比＋1.2ポイント、中学校が全国比－4.1ポイントである。

○　「算数（数学）の勉強は大切だと思いますか」の問いに対して、肯定的な回答をしている児童生徒の割合が、小学校・中学校ともに全国よりも高い。しかし、「算数（数学）の授業が好きですか」「算数（数学）の授業の内容はよく分かりますか」の問いに対しては、小学校は肯定的な回答をしている割合は高いが、中学校は低い結果となっている。

○　「算数（数学）の授業が好きである」と算数（数学）の授業の内容はよく分かる」ことには関連性があると考えられることから、児童生徒の興味関心を生かしながら「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」を育成していく授業を展開していくことが大切である。

※　「肯定的な回答」とは、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」など肯定的な選択肢を選択した回答です。

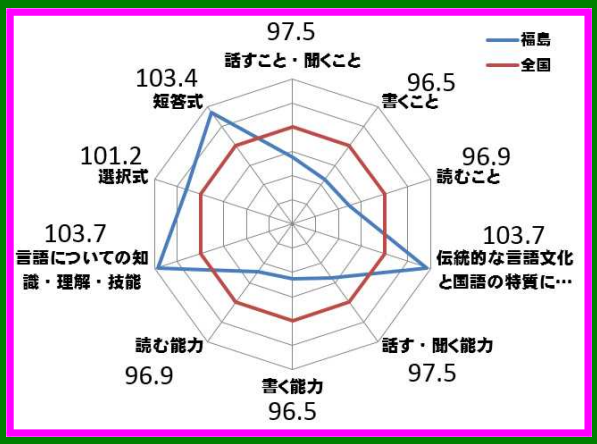
3　国語科、算数・数学科、理科の分析

小学校国語

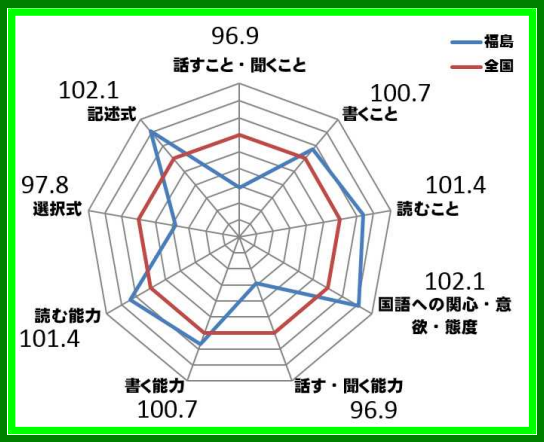
※　レーダーチャートでは、全国の平均正答率を１００とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

国語A



国語B



傾向と課題

○　国語Ａは全国平均をやや上回り、国語Ｂはおおむね全国平均である。
○　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、今年度も全国平均を上回っている。
○　「話すこと・聞くこと」領域については、国語Ａ・Ｂともに全国平均を下回っている。
○　国語Ｂでの　「記述式」の問題は、全国平均を上回るか全国平均と同程度である。「書く能力」は全国平均と同程度であるが、無解答率は全国平均を下回っている。

課題が見られた設問

Ａ４　「物語を読み、心に残ったことを説明する」
Ａ５　「書いた文章を読み直す」
Ａ７　「敬語を使う」

力を入れたい学習

○　登場人物の心情について、情景描写を基に捉えること
○　文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くこと
○　相手や場面に応じて適切に敬語を使うこと

課題が見られた設問

Ｂ１三「言葉の使い方を見直すために、話し合う」
Ｂ２二「献立を推薦する文章を書く」
Ｂ３一「伝記を読み、自分の考えをまとめる」

力を入れたい学習

○　話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること
○　目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書くこと
○　目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読むこと

改善のポイント

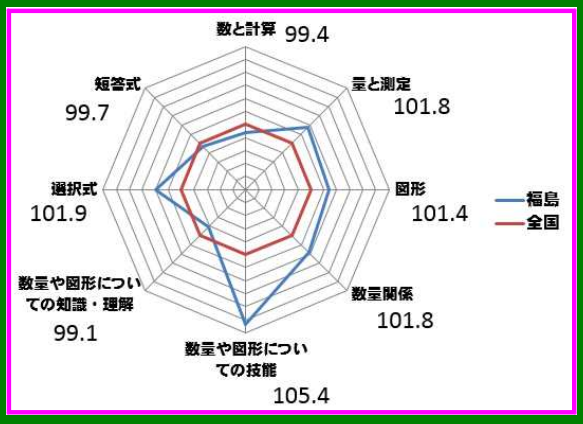
○　自分の考えを深め広げるという「共有」を行うことのねらいを踏まえ、他者の考えや意見について考えたり、自分の考えを見つめ直したりする時間と場を設定する。
○　話合いの前後に、自分の考えを書く機会を必ず設定する。その際、文章を読む人を意識させ、相手に伝わる表現となっているかという視点をもって書くようにさせる。
○　教科書教材以外の本や資料も用い、見方・考え方を深め広げるとともに、二つの文章を比べたり関連付けたりする学習活動を設定する。

小学校算数

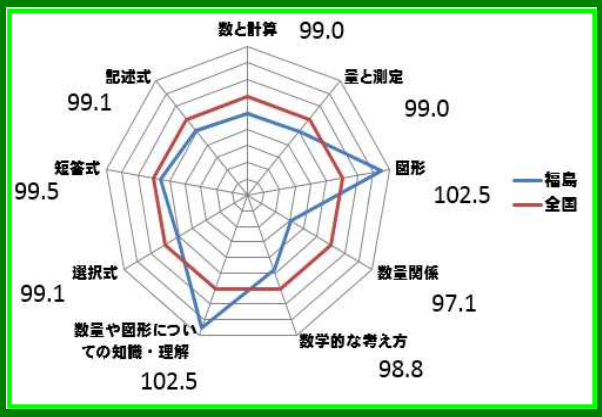
※　レーダーチャートでは、全国の平均正答率を１００とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

算数A



算数B



傾向と課題

○　算数Ａ・Ｂについてはおおむね全国平均である。
○　算数Aは「数と計算」の領域で全国平均を下回っている。
○　算数Bは「図形」の領域で全国平均を上回っているが、「数量関係」の領域で全国平均を下回っている。
○　算数Ｂでの「記述式」の問題は全国平均を下回るが、平均正答率に改善の傾向が見られる。また、「記述式」における無解答率は、全国平均を下回っている。

課題が見られた設問

A1(1)「針金0.2mの重さと針金0.1mの重さを書く」
A3　「３けたの整数どうしの大きさを比べ、十の位に入る適切な数字を書く」
A7(1)「円周率を求める式として正しいものを選ぶ」

B2(2)「1回の玉入れゲームの時間を3分に最も近い時間にするための玉を投げる時間を、表に整理して求める」
B3(2)「一つの事柄について表した棒グラフと帯グラフから読み取ることができることをまとめた文章に当てはまるものを選ぶ」

力を入れたい学習

○　問題場面における二つの数量の関係を理解できるようにすること
○　数の大小を比較するために、どの位の数字に着目すればよいのかを判断することができるようにすること
○　円周率が、円周の直径に対する割合であることを理解できるようにすること

○　日常生活の問題の解決のために情報を収集し、それらを表に整理して、条件に合う事柄について適切に判断することができるようにすること
○　目的に応じてグラフを作り、複数のグラフを関連付けて考察することができるようにすること

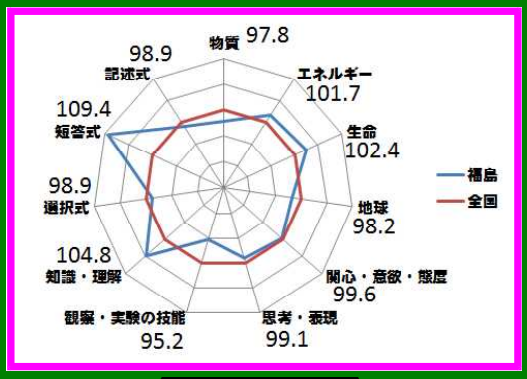
改善のポイント

○　解決の見通しをもち問題の類似性に着目して類推したり、共通性に着目して一般的な事柄を帰納したり、ある事柄が正しいことを根拠を基にして演繹的に明らかにしたりする学習過程を重視する。
○　言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて数学的に表現されたものの意味や考え方を理解し、それらを用いて問題を解決したり振り返ったりする学習過程を重視する。
○　数学的な表現を洗練する学習過程を重視する。

小学校理科

※　レーダーチャートでは、全国の平均正答率を１００とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況



傾向と課題

○　理科の平均正答率は、おおむね全国平均である。
○　「短答式」の問題での平均正答率が全国平均を上回っている。
○　A区分「物質」及びB区分「地球」で全国平均を下回っている。
○　「知識・理解」で全国平均を大きく上回っている。しかし、「思考・表現」や「観察・実験の技能」で全国平均を下回っている。
○　「記述式」の問題はおおむね全国平均であるが、無解答率は全国平均を下回っている。

課題が見られた設問

1 (2)　「調べた結果について考察する際に、問題に対応した視点で分析できる」
2 (2)　「予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できる」
2 (4)　「より妥当な考えをつくりだすために、複数の情報を関係付けながら、分析して考察できる」
4 (1)　「観察、実験の器具の適切な操作方法を身に付けている」
4 (2)　「学んだことを自然の事物・現象に適用できる」

力を入れたい学習

○　問題を明確にし、その視点に沿って結果から必要な情報を適切に選択すること
○　予想を確かめられた場合に得られる結果を見通し、実験方法の妥当性などを児童同士で検討すること
○　複数の情報を収集して児童同士が共有し、それを関係付けて話合いをすること
○　観察、実験の器具の操作手順を理解するだけでなく、使用する目的や操作の意味を確認すること
○　学んだことを自然の事物・現象に適用できるか検討すること

改善のポイント

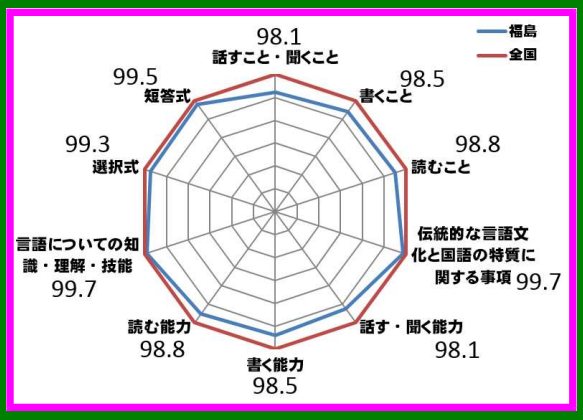
○　観察、実験から得られた結果を基に考察するために、予想と結果を比較しながら、問題に対応して必要な情報は何かという視点で話し合う場面を設定する。
○　見通しをもって観察や実験に取り組むため、どのような予想を確かめたい観察や実験なのかを明確にし、実験方法の妥当性や得られる結果の見通しなどを検討する場面を設定する。
○　多面的に分析して考察するために、児童が目的に応じて複数の情報を分担して収集し、どこからどのようなことが言えるのかについて話し合う場面を設定する。その際、ICT機器を積極的に活用することも大切である。
○　問題を解決するために、どうして観察、実験の器具が必要であるのかを確認する場面を設定する。
○　学んだ規則性・法則性が身近な自然の事物・現象に当てはまるのかを確かめる課題を設定し、問題解決的な学習をする。

中学校国語

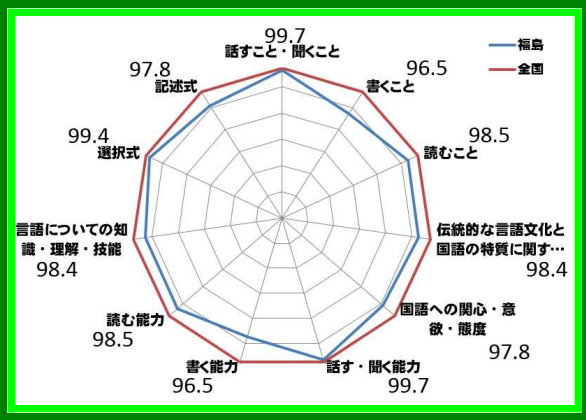
※　レーダーチャートでは、全国の平均正答率を１００とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

国語Ａ



国語Ｂ



傾向と課題

○　国語Ａ・Ｂともに、おおむね全国平均である。
○　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」においては、国語Ａでは、前年度とほぼ同程度であるが、国語Ｂでは、前年度からの改善傾向が見られる。
○　「書く能力」がやや全国平均を下回り、無解答率も全国平均をやや上回っている。

課題が見られた設問

Ａ５二　「説明的な文章を読む」
Ａ８三エ、Ａ８四ニ
「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」

力を入れたい学習

○　文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉えること
○　語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと
○　目的に応じて文の成分の順序や照応、構成を考えて適切な文を書くこと

課題が見られた設問

Ｂ１一、三　「説明的な文章を読む」
Ｂ３三　「文学的な文章を読む」

力を入れたい学習

○　文章とグラフとの関係を考えながら内容を捉えること
○　目的に応じて文章を読み、内容を整理して書くこと
○　相手に的確に伝わるように、あらすじを捉えて書くこと

改善のポイント

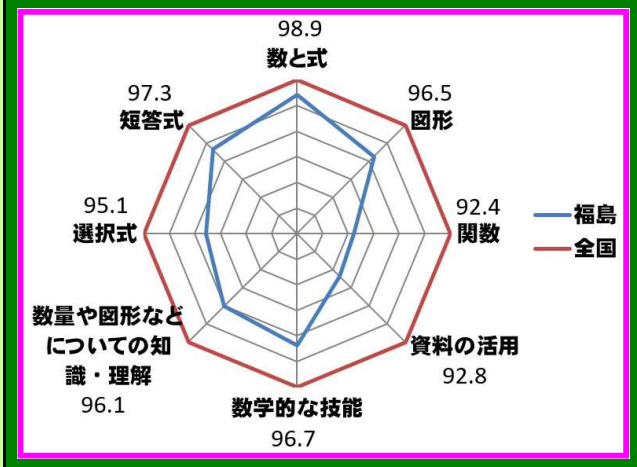
○　状況や場面設定を工夫し、何のために読むのか、何のために書くのかを生徒にしっかりと意識させた上で指導を行う。
○　個人の考えや表現等の妥当性を確認したり、考えを深めたり、広げたりするために、伝え合う活動（共有）を意図的に取り入れる。
○　図表の役割について考えたり、どのような図表が必要かを考えたりするなど、文章と図表の関係を読み解く授業を展開する。

中学校数学

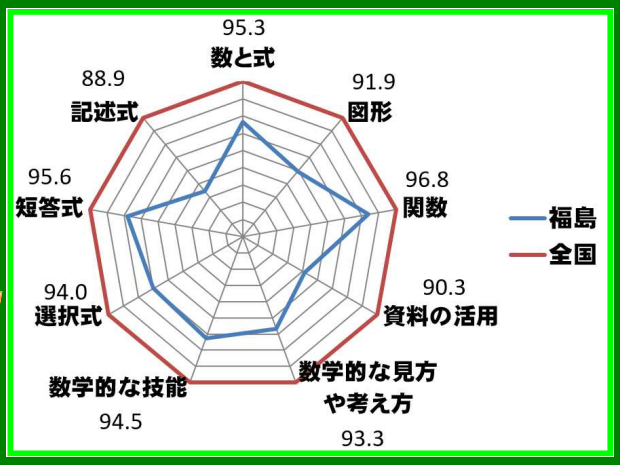
※　レーダーチャートでは、全国の平均正答率を１００とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

数学A



数学B



傾向と課題

○　数学Ａ・Ｂともに全国平均を下回っている。
○　数学Ａの「数と式」領域の正答率が、昨年度よりも全国平均との差が小さくなっている。
○　数学Ａ・Ｂともに「資料の活用」領域の正答率が全国平均を大きく下回っている。
○　数学Ｂでは「記述式」の問題形式について全国平均を大きく下回っており、構想を立てて説明する問題、判断の理由を説明する問題、数学的な表現を用いて説明する問題に課題が見られる。無解答率も全国平均を上回っている。

課題が見られた設問

Ａ2(4)　「等式S＝1/2 ahを、aについて解く」
Ａ7(1)　「△ＡＢＣと△ＤＥＦが合同であるための条件として、正しいものを選ぶ」
Ａ10　「点（－２，３）の位置を座標平面上に示す」
Ａ15(2)　「大小２つのさいころを同時に投げるとき、和が８になる確率を求める」

Ｂ1(3)　「全校よりも１年生の回答用紙によるくじ引きの方が曲Ｆが選ばれやすいことの理由を確率を用いて説明する」
Ｂ2(2)　「はじめの数としてどのような整数を入れて計算しても、計算の結果はいつでも４の倍数になる説明を完成する」

力を入れたい学習

○　ある文字について解くことの意味を理解し、等式を変形することができるようにすること
○　２つの三角形が合同であるために必要な辺や角の相等関係について理解できるようにすること
○　座標平面上に点の位置を示すことができるようにすること
○　表などを利用して、確率を求めることができるようにすること

○　不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を説明できるようにすること
○　事柄が成り立つ理由を、構想を立てて説明することができるようにすること
○　他者の計算を解釈し、数学的な表現を用いて説明することができるようにすること

改善のポイント

○　生徒がその授業で何ができるようになればよいのかねらいを明確にして、事象を数理的に捉え、数学の問題を見いだし、問題を自立的、協働的に解決する過程（問題発見・解決のプロセス）を意識して授業を構築する。
○　問題解決の過程において、一人一人のつまずきや誤答を取り上げ、生徒自身が主体的・対話的に判断したり、改善したりする学習活動を取り入れ、知識・技能を確実なものにできる授業を実践する。
○　生徒がその授業で何ができるようになったのか、どのように解決したのかを見取り、単元全体を見通して一単位時間の評価をする。

中学校理科

※　レーダーチャートでは、全国の平均正答率を１００とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

傾向と課題

○　理科の平均正答率は、おおむね全国平均である。
○　「生物的領域」は全国平均を上回っているが、「物理的領域」、「地学的領域」で全国平均を下回っている。
○　「自然事象への関心・意欲・態度」、「科学的な思考・表現」で全国平均を下回っている。
○　「記述式」の問題での平均正答率が低くなっている。

課題が見られた設問

３(2)　「シミュレーションの結果について考察した内容を検討して改善し、台風の進路を決める条件を指摘できる」
５(2)　「反応の時間を測定する装置や操作を刺激と反応に対応させた実験を計画できる」
６(2)　「オームの法則を使って、抵抗の値を求めることができる」
９(2)　「植物を入れた容器の中の湿度が高くなる蒸散以外の原因を指摘できる」

力を入れたい学習

○　時間的・空間的に長大な自然の事物・現象を科学的に探究する上で、コンピュータを用いたシミュレーションを行い、結果を考察すること
○　理科室で再現が困難な自然の事物・現象を科学的に探究する上で、モデルを使った観察・実験を行うこと
○　事物・現象を科学的に探究する上で、規則性を見いだすこと
○　自然の事物・現象を科学的に探究する上で、「原因として考えられる要因」を全て指摘し、問題解決の知識・技能を活用して、条件を制御した実験を計画すること

改善のポイント

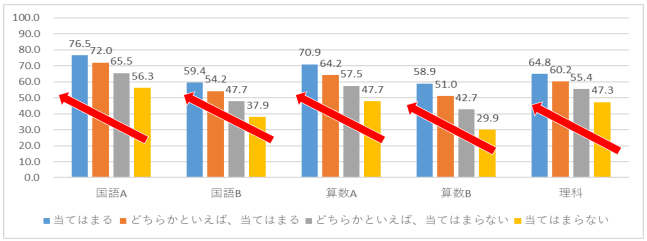
○　影響を与える複数の条件を制御できるシミュレーションを行う学習場面を設定する。
○　実験を計画する際に自然の事物・現象と実験の装置や操作との対応を指摘する学習場面を設定する。
○　実験の結果をグラフに表し、関係を見いだす場面を設定する。
○　「変化すること（従属変数）」と「原因として考えられる要因」を全てあげ、それらの妥当性を検討した上で、それらの要因を「変える条件（独立変数）」と「変えない条件」とに整理して、実験を計画する場面を設定する。

4 児童生徒質問紙調査、学校質問紙調査の結果概要

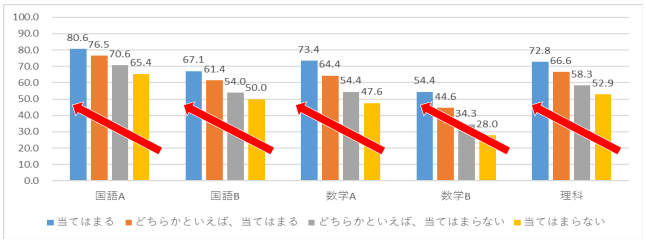
児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の現状

（１） 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか
【児童生徒質問紙】

小 学 校　クロス集計（児童が回答した選択肢別正答率）

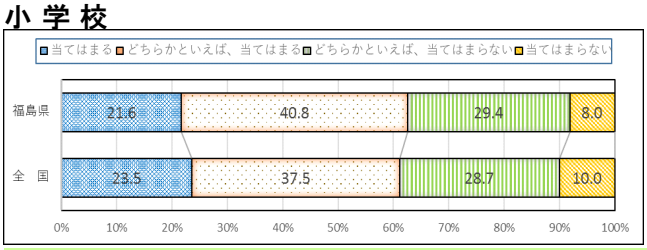


中 学 校　クロス集計（生徒が回答した選択肢別正答率）

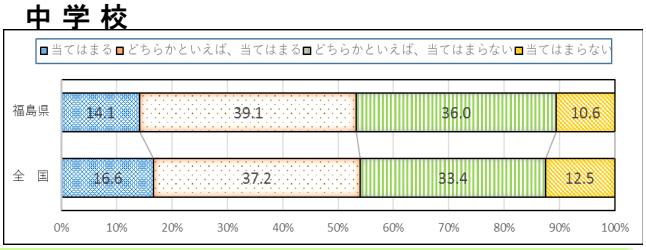


（２）自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか
【児童生徒質問紙】

小 学 校

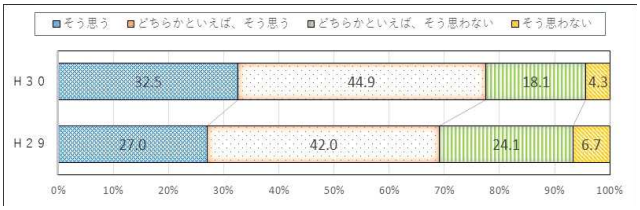


中 学 校

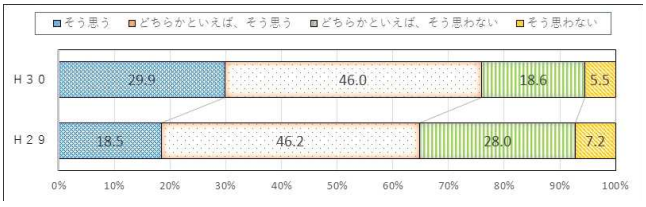


（３）話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか
【児童生徒質問紙】

小 学 校



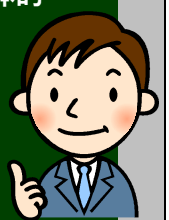
中 学 校



○ 「主体的な学び」に係る（１）の質問から、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる児童生徒ほど、学力が高い傾向にあることが分かる。
○ 「対話的な学び」に係る（２）の質問では、小学校においては肯定的な回答が全国平均をやや上回り、中学校においては肯定的な回答がおおむね全国平均となっている。相手に配慮し、自分の考えを伝わりやすくするように工夫している姿がうかがえる。
○ 「深い学び」に係る（３）の質問では、肯定的な回答が昨年度より大幅に増加しており、各学校での取組が奏功していると考えられる。

今後に向けたPoint！

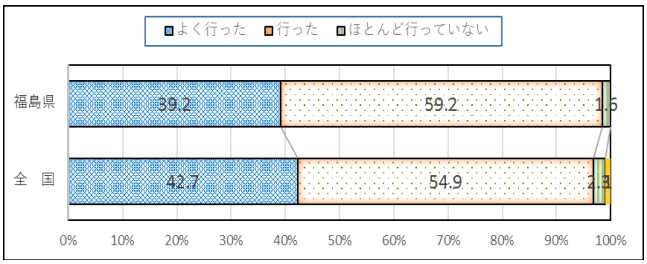
○ 児童生徒の資質・能力の向上を目指して、ふくしまの「授業スタンダード」を活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を今後も推し進めていきましょう。
○ 課題の解決に向けて自ら考えたり、工夫して発表したり、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたりすることを、単元づくりや授業づくりの視点に生かしていきたいものです。
○ 特に深い学びに関しては、各教科等における「見方・考え方」を働かせることが鍵となってきますので、さらなる改善に向けて授業改善に取り組んでいきましょう。



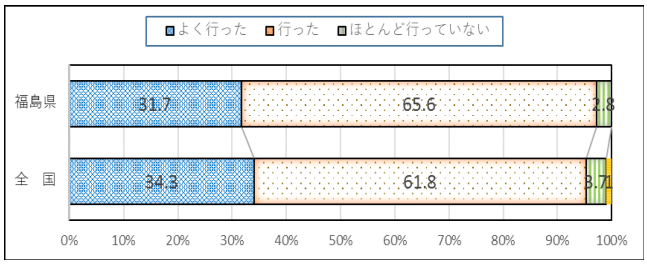
教員相互の学び合いに基づく授業の質的改善

○　全国学力・学習状況調査の自校の分析結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか　【学校質問紙】

小 学 校

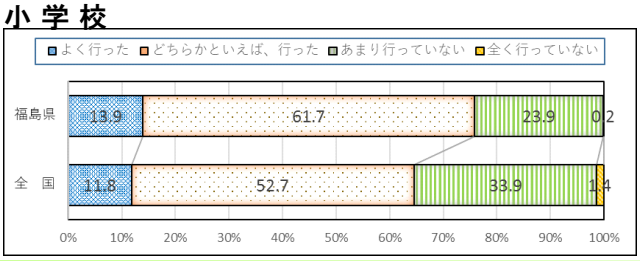


中 学 校

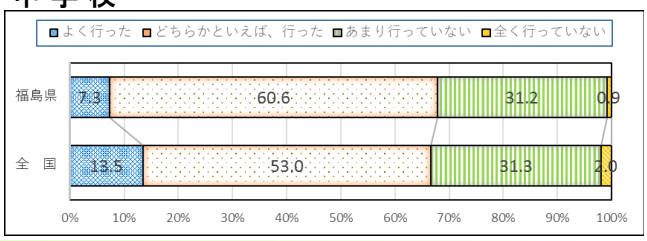


○　算数・数学の指導として、発展的な学習の指導を行いましたか　【学校質問紙】

小 学 校

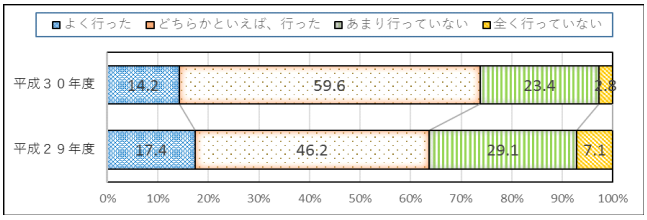


中 学 校

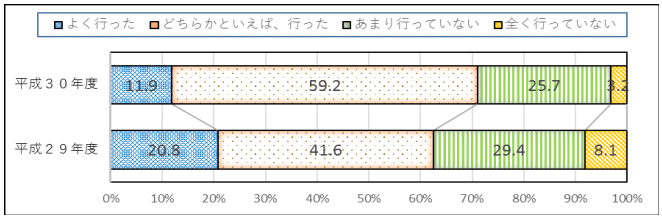


○　全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中学校（又は小学校）と成果や課題を共有しましたか　【学校質問紙】

小 学 校



中 学 校

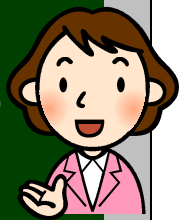


○　本調査の分析結果を教育活動の改善に活用している学校の割合は、全国平均をやや上回っている。
○　算数・数学において発展的な指導を行った学校の割合は、全国平均を上回っている。特に小学校における肯定的な回答は、全国平均を11.1ポイント上回っている。
○　本調査の分析結果について、近隣の中学校（又は小学校）と成果や課題を共有している学校の割合が前年度よりも小学校で10.2ポイント、中学校で8.7ポイント増加しており、小中連携が推進されていることがうかがえる。
※　クロス集計の結果から、上記３項目について数値が高い学校ほど、児童生徒の学力が高い傾向にある。

今後に向けたPoint！

○　全国学力・学習状況調査の成果や課題を、調査対象学年・教科だけでなく、学校全体で教育活動を改善するために活用するなど、同僚性・協働性を発揮した校内研修の充実に努めましょう。また、小学校、中学校間で共有するなど、小中連携に力を入れ、長期的な視野に立って、児童生徒の資質・能力を育成していきましょう。

○　算数・数学の指導として、発展的な学習の指導にも力を入れることが大切です。基本的な指導事項として知識・技能の習得を徹底することはもちろんですが、思考力・判断力・表現力等を育むために、文脈の中で問いに出合わせるなど、発展的な学習にも挑戦させることにより、知識・技能をさらに定着させることにつながります。



5　ふくしまの「授業スタンダード」を活用した授業の充実

今後の授業改善の方策の視点として、国語科では「書くこと」に関連した授業のポイントを、算数・数学科では学習過程の「解決の見通し」や「まとめ・振り返り」のポイントを示しました。

小学校国語

（国語B[2] 献立を推薦する文章を書く「かみかみあえ」 設問二 正答率13.5%）

＜授業改善の方策＞　ねらい（指導事項）を明確にした指導と関連資料の活用

〔第5学年及び第6学年〕 B　書くこと
ウ　目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。

全国学力・学習状況調査において、児童が最も苦手とする指導事項の一つです。
特に、二つの文（文章）から、必要な部分を抜き出し、制限時数内で内容をまとめる問題を、極めて苦手としています。

5年生教材を例に･･･
1）『千年の釘にいどむ』
「漆器など職人に関する資料」（職人の見方・考え方など共通点を書く）
「釘職人の資料」（その成り立ちや説明を書く）
2）『和の文化を受けつぐ－和菓子をさぐる』
「筆やろうそく、焼き物やしっ器、和紙、織物などの歴史の資料」
（和菓子との比較から共通点を見いだす文を書く）
「ケーキの資料」（和菓子との共通点や相違点を書く）
3）『手塚治虫』
「別の手塚治虫伝記」（多様なエピソードにふれ、立体的な手塚像を書く）

確かに教科書にはありませんが、**先生の少しの努力と工夫**が、子どもの言語能力を高めることになります。**教科書教材に関連する資料を準備し、二つを関係付ける課題**を出しましょう！
（左記は、資料を見つける視点です。参考にしてください。）

【学習の流れ】

〈教材との出合い〉〈学習課題の把握〉	〈追究・解決〉			〈まとめ・振り返り〉
〈個人〉	自力で書く〈個人〉	検討する〈学級全体〉	推敲する〈個人〉	〈全体・個人〉
一文にまとめる必要感を見いだし、課題解決への見通しをもつ。	一人で、情報を整理して書く。	例文を基によさや改善点を出し合う活動を通して、学級全体で改善の方向性やポイントを確認する。	学級全体で検討したことを基にし、適切な文に書き直す。	二文を一文にするコツやポイントを出し合い、共有し、ノートにまとめる。
	自分の考えをまとめる時間		***表現を磨く時間***	***次につなげる時間***

中学校国語

（国語B[1] 説明的な文章を読む「天地無用」 設問三 正答率12.0%））

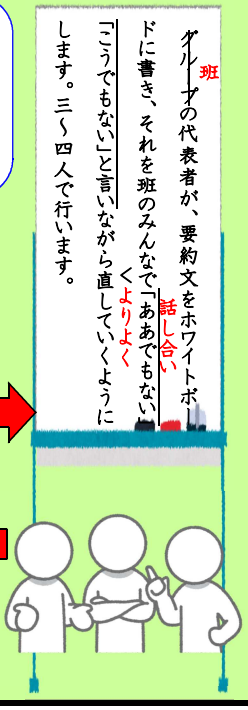
＜授業改善の方策＞　目的や意図に応じて読んだり、書いたりすることの指導の充実

〈授業における課題と授業改善の必要性〉
- 相手、目的、場面等を意識して、情報を理解したり、伝えたりする学習活動が十分に確保されていない。
- 読み取った内容を状況に応じて整理して書くという学習活動自体があまり行われていない。

→その結果が、12.0%という正答率になってあらわれてきています。学習指導要領に「目的や場面に応じ」「目的や意図に応じ」という文言が頻出する中で、この正答率の低さに正面から向き合い、授業改善のメッセージとして受け取る必要があります。

目的意識、相手意識等をもたせる際には、生徒たちにとって必要感・有用感のあるもの（社会生活の場面を意識するなど）となるよう配慮しましょう。

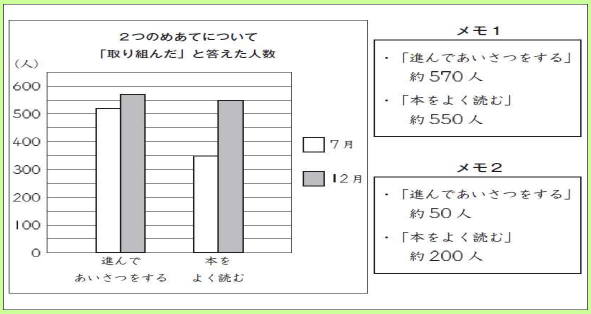
<授業の展開例>
1　何のために読むのか、どのように表現するのか等、目的や意図を明確にした上で言語活動を設定する。
2　個人で考えて読む、書く時間を確保する。
3　互いの考えを伝え合う活動をとおして、小集団・学級全体で改善の方向性やポイントを確認する。
　□　検討事項→何を残し、何を改め、何を付け加えるのか
　□　指導事項→語句や文の使い方、段落相互の関係等
4　個に戻し、考えを再構築する時間をしっかりと確保した上で、よりよい表現に向かわせる。
5　学習を振り返る。
　□　学習を通して学んだこと、できるようになったこと等



小学校算数

＜授業改善の方策＞　「数学的に表現する力」「振り返って考える力」を付ける

H30 B3「アンケートの結果調べ」の例



(1) メモ1とメモ2は、それぞれグラフについてどのようなことに着目して書かれていますか。それぞれ着目していることを、言葉や数を使って書きましょう。

メモ１が12月の人数であることは捉えていることができても、メモ２が二つの月の人数の差であることを捉えることができていません。

「数学的に表現する力」を付ける

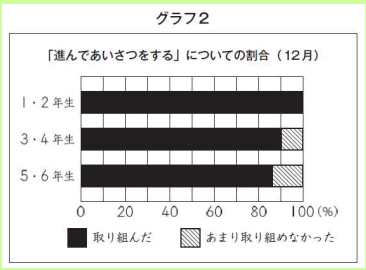
チェック

メモの情報とグラフを関連付け、総数や変化に着目していることを解釈し記述する。

＜授業改善のためのポイント＞
グラフの特徴を複数の観点で捉えて、情報を読み取ることができるようにすることが大切です。

＜考えられる発問例＞
- メモ1「進んであいさつをする」約570人と「本をよく読む」約550人は、グラフのどの部分から読み取れますか。
- メモ2「進んであいさつする」約50人と「本をよく読む」約200人は、グラフのどの部分から読み取れますか。
- めあてに取り組まなかった人数は、グラフから読み取れますか。（それはなぜですか。）

観点の違い(「総数」と「変化」という言葉)を子どもから引き出し、それを使った説明へと表現を洗練させましょう。



(2) ㋐にあてはまるものを1から3までの中から1つ選んでその番号を書きましょう。また、㋑にあてはまるものを4と5から選んでその番号を書きましょう。

㋐
1　１・２年生
2　３・４年生
3　５・６年生

㋑
4　小さい
5　大きい

・　「進んであいさつをする」に「取り組んだ」と答えた人数が，いちばん少ないのは［　㋐　］です。

・　［　㋐　］の，「進んであいさつをする」に「取り組んだ」と答えた人数の割合は，いちばん［　㋑　］です。

グラフ２のみを見て、帯グラフから人数を判断しようとしています。

「振り返って考える力」を付ける

チェック

一つの事柄について表した棒グラフと帯グラフから読み取ることができることを判断する。

＜授業改善のためのポイント＞
あるグラフから読み取った情報が適切かどうかを検討したり、考察した結果から見いだした新たな問題を解決したりすることが大切です。

＜考えられる発問例＞
- グラフ1とグラフ2の違いは何ですか。
- 割合で人数が比較できるのは、どのような場合ですか。また、比較できないのは、どのような場合ですか。

割合で比較できる場合とできない場合を、確実に区別できるようにしましょう。
目的やデータの種類に応じて考察し、結論をまとめることができるようにしましょう。

中学校数学

＜授業改善の方策＞　主体的・対話的で深い学びを実現するため、ねらいを明確にした「まとめ・振り返り」の場を設定する

<授業における課題>
自力解決の時間を確保し、その後、話合いを行う授業が多く見られるが、それだけで主体的・対話的で深い学びは実現できない。また、課題設定や課題解決に多くの時間を使い、十分に「まとめ・振り返り」の時間を確保していない。生徒が「何を学習したか」を明確にできないまま適応問題を解いたり、「どのように学習してきたか」を振り返らずにまとめを行ったりするため、学びを連続させることができない。

<授業改善のためのポイント>
単元全体を通してどのような資質・能力を育てたいのかを明確にして、一単位時間のねらいを設定する。その際、具体的な生徒の姿を明確にもつことが大切である。
生徒が「何を学習したのか」を明確にするためにも、どのように「まとめ・振り返り」を行っていくかがポイントとなる。授業の終末のみの「振り返り」ではなく、授業のいたるところで生徒の思考を見取り、振り返ることで、学びに連続性が生まれ、次の「学びに向かう力」の育成が期待できる。

＜調査問題Ｂ１（２）＞
１日目がＡ、２日目がＢになる確率を求める。

アンケートの結果１

順位	曲	回答した生徒数(人)			
		1年生	2年生	3年生	全校
1位	A	16	19	20	55
2位	B	12	23	18	53
3位	C	15	17	20	52
4位	D	9	18	23	50
5位	E	16	8	5	29
6位	F	20	4	3	27
7位	G	8	7	6	21
8位	H	6	5	2	13
合計		102	101	97	300

その日に流す曲を，アンケートの結果１の上位４曲の中からくじ引きで決める。くじ引きは１日１回ずつ行い，４日間で４曲を流す。

くじ引きの方法

① A，B，C，Dが１つずつ書かれた４枚のくじを用意する。
② １日目は，その４枚のくじの中から１枚を引く。ただし，引いたくじは戻さないものとする。
③ ２日目以降は，残ったくじの中から１枚を引く。ただし，引いたくじは戻さないものとする。

A　B　C　D

ねらいの明確化

単元全体や小単元、一単位時間の中でどのような資質・能力を育てたいのかを明確にし、生徒がその授業で何ができるようになればよいのか具体的な姿をイメージしてねらいを設定します。

つまずきの見取り

一人一人の学びの姿を、「追究・解決への意欲はどうか」、「他者との対話や先哲の考え方などの手掛かりが必要か」、「見方・考え方を働かせているか」等を視点に見取ります。
問題発見・解決のプロセスで生徒のつまずきを見取り、乗り越えさせるための手立てを講じたり、生徒の意見すべてに価値があるという考えのもと、誤答を生かし、課題解決へつなげる支援をしたりします。

評価から「新たな学び」へ

「何を学習したか」をまとめ、「どのように学習してきたか」を振り返ります。その「振り返り」が、学びを深め、次の「学びに向かう力」を育成します。
学びの連続性を大切にするために、教師は単元を見通した評価計画のもと、「まとめ・振り返り」の場を設定します。

＜話合いのコーディネート＞
・話合いの論点や議題の明確化
・生徒の考えを引き出し、つなげる支援
・問い返しやゆさぶりなどの働きかけ
・話合いに全員を参加させる姿勢　など
※「授業スタンダード」P5

＜思考過程の可視化＞
・吹き出し、線囲み、矢印等
・チョークの色の使い分け
・小黒板の活用　　など
※「授業スタンダード」P5

＜考えを深めるための問い返し＞
【事実】「どういうことですか」
【方法】「どのように考えたのですか」
【理由】「どうしてそうなるのですか」
※「授業スタンダード」P5

＜調査問題Ｂ１（３）＞
全校よりも１年生の回答用紙によるくじ引きの方が曲Ｆが選ばれやすいことの理由を確率を用いて説明する。

曲	回答した生徒数(人)			
	1年生	2年生	3年生	全校
E	16	8	5	29
F	20	4	3	27
G	8	7	6	21
H	6	5	2	13
合計	50	24	16	90

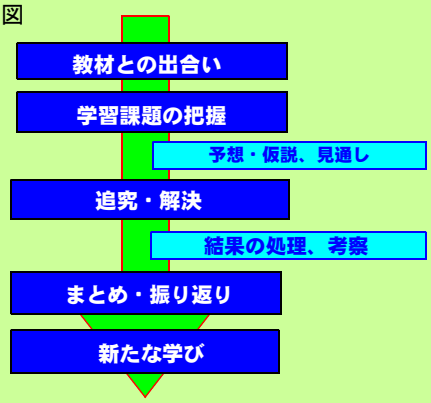
調査問題では、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する問題が設定されています。「アンケートの結果」から、必要な数値を選択し、それまでに学習した知識・技能を活用して解決に向かいます。新たな「問い」や追究・解決したいことを見つけることが、価値あることを生徒に実感させていきたいものです。

小学校理科

＜授業改善の方策＞　思考力、表現力等の育成につながる言語活動の充実

理科の授業では、「図」のような問題解決的な学習の流れが重要です。
特に「予想・見通し」や「結果の処理、考察」の場面において言語活動の充実を図ることにより、本県の課題である思考力、表現力等の育成を目指しましょう。

図



「授業スタンダード」P3～P6に掲載されている『教師の働きかけ』や『主体的・対話的で深い学びの実現に向けて』を参考にしましょう。

予想・仮説、見通し

〈授業改善のためのポイント〉

○　互いの予想や仮説を共有する活動の場を設定する。
・　既習内容や生活経験を基に根拠のある予想や仮説を共有することで課題解決への意欲を高めることができるようにする。

○　実験方法の妥当性や得られる結果の見通しなどを児童同士で検討する場を設定する。
・　自分の予想だけでなく、異なる他者の予想に対しても結果の見通しをもち、実験方法の妥当性を検討することができるようにする。

結果の処理、考察

〈授業改善のためのポイント〉

○　観察記録や実験データを整理したりグラフに処理したりする時間を確保する。
・　発達段階に応じて結果を定量的に捉えることができるようにする。

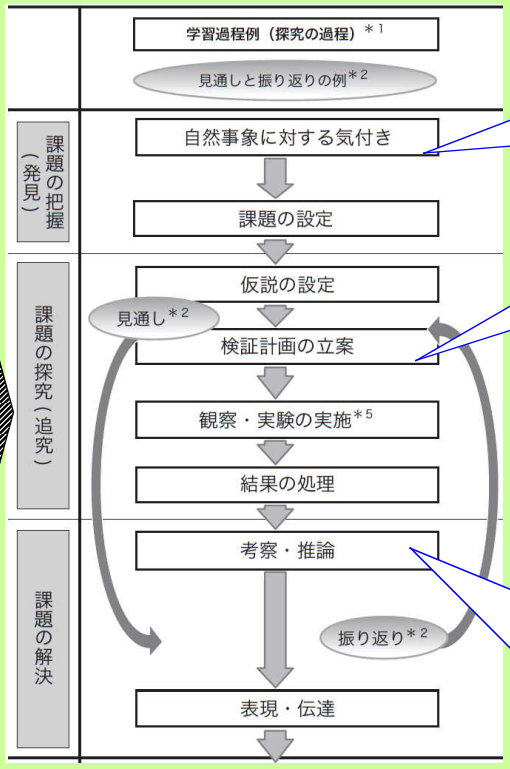
○　予想と得られた結果を比較しながらグループや学級全体で話し合う場を設定する。
・　複数のグループの結果を共有することで、より多面的に分析しながら合意形成することができるようにする。

中学校理科

＜授業改善の方策＞　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習過程の確立

<授業における課題>
多くの授業の中で観察、実験は行われているが、観察、実験の計画・方向付け・見通しをもたせていないため、主体的・対話的で深い学びが実現できていない。

<授業改善のためのポイント>
生徒に観察、実験の計画・方向付け・見通しをもたせることがポイントです。
例えば、授業の中で生徒の意見を生かしながら課題を解決する方法を立案する場面、装置や操作の意味を確認する場面を設定していくことが大切です。
また、観察、実験を行った際には、結果を分析し解釈する場面を設定します。



教材との出合わせ方を工夫し、興味・関心を高め、自然の事物・現象から問題を見いださせます。

見通しをもって課題や仮説の設定や観察、実験の計画を立案する学習が行われるようにします。

観察、実験の結果を分析・解釈して仮説の妥当性を検討したり、全体を振り返って改善策を考えたりする学習が行われるようにします。
話合いの場面では、あらかじめ個人で考え、その後、科学的な根拠に基づいて議論するなどして、自分の考えをより妥当なものになるようにします。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　理科編　P6より

⑥ 教員相互の学び合いが生まれる学校の実践事例

小学校における「教科担任制」による授業改善

教師の専門性や得意分野などを生かした「教科担任制」

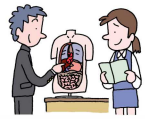
なぜ、「教科担任制」なの？

先生方が、もっている専門性や得意分野を生かし、子どもたちが学ぶことの意義を実感できる授業を実践することで、先生方にも授業をもっと楽しんでもらうとともに、子どもたちの学ぶ意欲を高め学力向上につなげましょう。

「教科担任制」を進めるポイントは？

○　先生方の専門性や得意分野、研究教科等の把握
○　より質の高い授業実践
○　授業の進め方やノート指導等の温度差のない統一した指導の実現
○　時間割の組み方の工夫

算数専門の先生


理科専門の先生

英語が堪能な先生

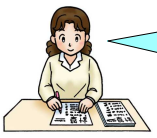
音楽専門の先生

【校長先生】

先生方には、専門性を磨いてほしいのです。自分が、指導を得意とする教科があることで、その教科の資質・能力を子どもに育むことができます。さらに、自信をもって取り組むことで、子どもの学びの様相や心理面にも配慮して、教科指導を通して人間形成を図ることができます。一つの教科の専門性を高めることで、ほかの教科にもその指導方法が生かされ、教育課程全体を通して子どもを育てることができるようになります。

A小学校の取組例

①　授業交換（６学年国語科、算数科）
　○　担任の専門性を生かした授業交換
　　１組担任：算数科　　２組担任：国語科
②　教務主任による専科（５学年算数科）
　○　教務主任がＴ１、学級担任がＴ２を担当
③　理科専科による「タテ持ち」
　○　４～６年の理科の授業を専科が担当



教師の専門性を生かして教材研究を深めたり、系統性を意識して授業を構想したりすることができます。

先生方と授業の進め方や児童の学びの様子を話す機会が増えます。

B小学校の取組例

３人の担任と１人の加配教師の４人による教科担任制

	国語	書写	社会	音楽
１組	A教諭	A教諭	B教諭	D教諭
２組	B教諭	A教諭	B教諭	D教諭
３組	C教諭	A教諭	B教諭	D教諭

学級担任だからこそ、子どもの個性を理解しているので、学ぼうとする意欲や他の人たちとの関係性などを授業に生かすことができます。

どんな成果があるの？

教科の本質を理解しているので、児童生徒の一人一人の変容を適切に見取ることができます。

クラスをまたいで指導することで学年の子どもの様子が分かり、間違いの傾向などを授業に生かすことができます。

中学校における「タテ持ち」による授業改善

「タテ持ち」の特性を生かした質の高い授業への改善

～「教師間のコミュニケーション」を授業に生かす実践～

【例】
1学年3クラスで「タテ持ち」を行っているある中学校では、3名の数学の先生が同時間帯に同学年の授業を一斉に行うように時間割設定を工夫して、教科部会の時間を確保しています。

「タテ持ち」って何?

一人の教員が複数の学年を担当する指導体制のことです。教師間で指導方法を共有し、協働して担当教科の授業づくりを行うことを重視するものです。

【校長先生】

「タテ持ち」のメリットは?

「教科を担当する教員同士の学び合い」です。教員同士が指導方法や教材についての共通理解を図ったり、授業についての悩みを相談し合ったりするなど、コミュニケーションをとる機会が増え、質の高い授業へ改善されます。さらに、若い先生方の指導力向上はもとより、ベテランの先生方の意識改革にもつながります。

教科部会等の時間を確保するための工夫は?

【A先生】

「タテ持ち」では、日頃のコミュニケーションが大切ですね。ただ、教科部会を放課後に設定すると、部活動や会議等で実施できないことも多いですね。

	1組	2組	3組
1年	A先生		
2年	B先生		
3年	C先生		

→

	1組	2組	3組
1年	A先生	B先生	C先生
2年			
3年			

同時間帯に同学年の授業を行うことで教科部会を時間割内に設定しやすくなり、授業進度の把握や教材に関する話合い、生徒に関する情報交換などを効果的に行えるようになりますね。

【B先生】

月曜日の2時間目は2年生全クラスで、火曜日の1時間目は1年生全クラスで数学にしましょう。

どのように授業の質を高めるの?

取組例

【C先生】

コミュニケーションをこまめにとり、かつ同時間帯に授業を実施することで習熟度別学習や補充的な学習などのクラス編成の工夫ができます。

「互見授業」を基盤とした校内研修の日常化

ポイントを絞り、短時間で参観し合う「互見授業」の実践例

～「授業スタンダード」を活用した「私の授業のここを観てほしい！」～

【例】
ある小学校では、先生方の空き時間が少ない中、「10minutes授業参観」という形で互見授業を行うことで、短時間で気軽にお互いの授業を見合うという取組を行っています。

【授業者】

「今日は8番に重点を置いた授業をしますので、授業の展開の場面を参観していただけませんか。」

授業者は、授業参観用に準備された「授業スタンダードチェックシート」に、参観の際、重点的に見てもらいたい項目に○を記入して、先生方に提示します。

【参観者】

参観者は、授業者から提示された重点項目を中心に短時間で参観し、気付いたこと（児童の様子、変容等）、感想等を簡潔にまとめて授業者に渡します。

10minutes 授業参観用
授業スタンダードチェックシート

月　日（　）　校時			参観者氏名	
授業者			教　科	
参観時間帯	導入	展開　終末	単元名	

参観の際に重点的に見ていただきたい項目に○を記入

<授業の充実のために>

番号	項　目	チェック	ページ
1	単元(題材)の構想を明確にもっている。	4 3 2 1	1
2	本時のねらいを明確にもっている。	4 3 2 1	
3	授業の約束事や学習に向かう心構えを指導している。	4 3 2 1	2
4	子どもの「問い」や「思い・願い」を引き出し、学習課題を設定している。	4 3 2 1	3
5	子ども一人一人に追究・解決の計画や見通しをもたせている。	4 3 2 1	4
6	机間指導で子どもを見取り、適切に支援している。	4 3 2 1	

7　ふくしまの強みを生かし、課題の克服を目指して!

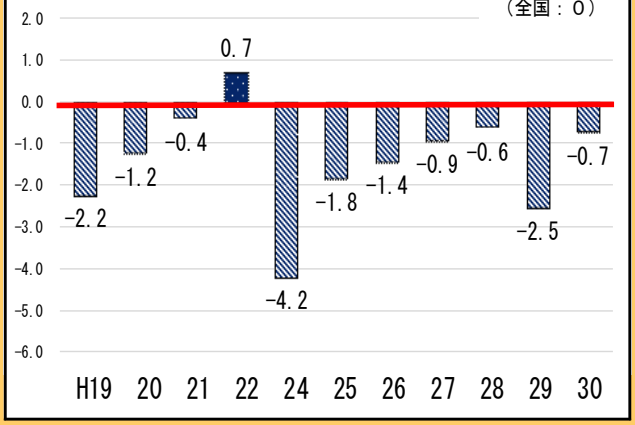
「頑張る学校応援プラン」～ふくしまの挑戦と戦略～

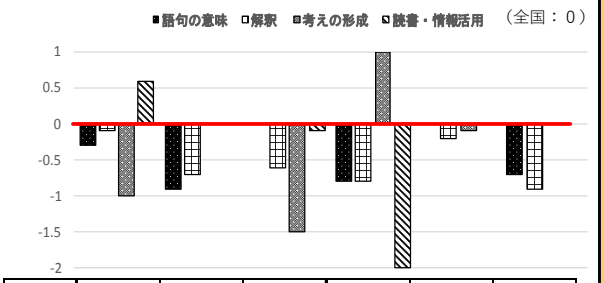
『学力向上に責任を果たす』3つのポイント

【ポイント1】
「主体的・対話的で深い学び」により、思考力・判断力・表現力等を育む
～全国学力・学習状況調査の総括と授業改善に向けての戦略～

ふくしまの「授業スタンダード」を有効に活用し、多くの教室で「主体的・対話的で深い学び」の実現が図られてきています。今後さらに、次のポイントを大切にして授業改善を進めましょう。

経年変化分析の結果を授業改善に生かす





	H25	H26	H27	H28	H29	H30
語句の意味	-0.3	-0.9		-0.8		-0.7
解釈	-0.1	-0.7	-0.6	-0.8	-0.2	-0.9
考えの形成	-1		-1.5	1	-0.1	
読書・情報活用	0.6		-0.1	-2		

○　事象や相手の考えなどを予想したり解釈したりできるようにすることが大切です。その際、言葉、数、式などの各教科特有の表現方法を関連付けて予想や解釈ができるように留意します。その上で、数値や形、条件などを変えたほかの場面に、解釈した見方・考え方等を活用できるように指導をすることが大切です。

○　「読むこと」においては、小中ともに「文章の解釈」に関わる設問で全国平均を下回っています。「文章の解釈」においては、文章の構造や内容を叙述に即して正確に理解させることが大切です。また、解釈をとおして理解したことをもとに、知識や経験とを結び付けて自分の考えをまとめさせていくことで「考えの形成」に関わる資質・能力を育むことにつながっていきます。

教育活動全体で児童生徒を育てる

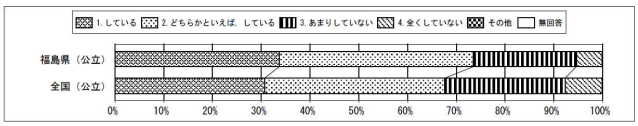
○　「話すこと・聞くこと」の資質・能力は、国語の学習のみならず、各教科等の学習や日常生活でも大切です。互いの立場をはっきりさせながら、計画的に話し合うことができるよう司会者や提案者、参加者などの役割に基づいて、自らの立場や意図を明確にしながら話し合う学習活動を展開していくことも大切です。

○　日常生活の問題を解決するためには、算数・数学等で身に付けた資質・能力を活用することが求められます。そのためには、日々の授業で、児童生徒がどのように学んできているのかといった実態を適切に捉え、児童生徒一人一人が働かせる見方・考え方を予測して授業を展開したり、導き出した結果について、日常生活の事象等に戻って解釈したり考察したりできるようにすることが大切です。

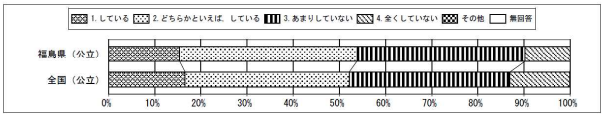
【ポイント2】
家庭学習の充実により、知識及び技能等の定着を図る
～自己マネジメント力の育成を図る～

【平成３０年度全国学力・学習状況調査　児童・生徒質問紙調査より】
「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」の質問に対して、児童・生徒ともに肯定的な回答の合計が全国を上回っています。福島県の子どもたちは家庭学習に主体的に取り組んでいます。こうした基盤の上に立って、これからの時代を生きる子どもたちに必要な家庭学習について、その質的な向上を図っていくことが大切です。

児童質問紙



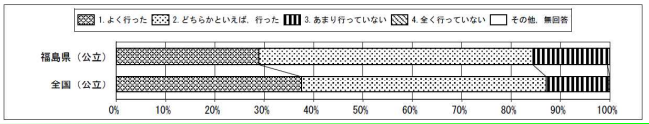
生徒質問紙



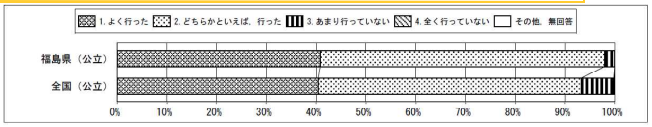
取組１　共通理解を図り指導します。
取組２　授業と家庭学習をつなげます。
取組３　内容・方法を指導します。
取組４　協力・連携体制を築きます。

昨日は計画どおりいかなかったので、今日は計画を見直そう。

取組１に関連した調査結果［学校質問紙（中学校）］



取組３に関連した調査結果［学校質問紙（小学校）］

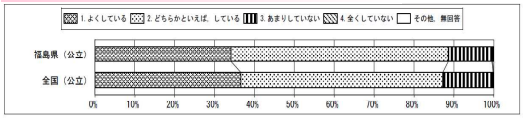


質問紙調査の結果から、宿題の量や内容について、教職員同士で話し合い調整していることがわかります。今後「調べ、考え、書く」を中心とした活用型の宿題に今後も取り組ませていくことが大切です。さらに、一人一人に応じたアドバイスをしたり、学習の目標を意識して家庭学習に取り組むよう支援したりしていくことも大切です。

【ポイント3】
教科、学年、校種を越えて学び合う体制づくり
～校内研修の活性化に向けて～

福島県の先生は、自らの専門性を高めていこうとしている教科・領域等を決め、校外の教科教育に関する研究会等に定期的・積極的に参加しています。

研修等への積極的な参加（小学校）

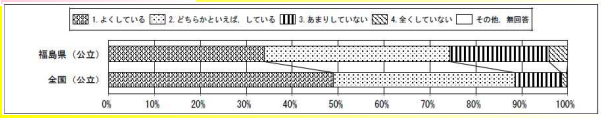


<校内研修の活性化のために>

番号	項　目	チェック
1	授業研究会に主体的に参加している。	4　3　2　1
2	教科や学年の枠を越えて、学び合っている。	4　3　2　1
3	互見授業を行うなど、日常的に授業研究をしている。	4　3　2　1
4	外部講師の助言や校外研修の成果を共有し、日々の授業に生かしている。	4　3　2　1
5	「授業スタンダード」を積極的に活用している。	4　3　2　1
		4　3　2　1
		4　3　2　1

互見授業を行い、授業の悩みを相談し合うことで、授業力を向上することが求められています。

学校でテーマを決め、講師を招聘するなどして、校内研修の充実を図りましょう。

中学校では、授業研究会で教科の枠を越えた議論を行い、学校全体で生徒一人一人を丁寧に見取り、成長させていこうとする取組が広がっています。

講師招聘等の校内研修（中学校）